

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	Geoff Hall, Literature in Language Education (2nd ed.) Palgrave Macmillan, 2015, xi + 340 pp.
Author(s)	小野, 章
Citation	英語英文學研究 , 65 : 45 - 54
Issue Date	2021-03-30
DOI	
Self DOI	10.15027/51103
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051103
Right	著作権は、執筆者本人と広島大学英文学会に帰属するものとします。
Relation	



書評

Geoff Hall,
Literature in Language Education
(2nd ed.)
Palgrave Macmillan, 2015, xi + 340 pp.

本書の筆者である Geoff Hall は、ウェールズ大学とスウォンジー大学で教鞭を取った後、現在はノッティンガム大学寧波中国校で、応用言語学、文体論、異文化間コミュニケーション等に関する研究・教育に携わっている。

本書は、文学を英語教育に関連付けようとしてきた諸研究者・実践者の功績を紹介するものであり、2005年に出版された第1版の続版として2015年に出版された。なお、ここでの英語教育とは、例えば英米人にとっての母語教育ではなく、第二言語・外国語教育としての英語教育のことである。

次に引用する目次から分かるように、本書は全部で9章から構成されており、3章ずつがPart 1～Part 3としてまとめられている。

Part 1 Language, Literature and Education

- 1 Literary Language and Ordinary Language
- 2 Reading Literature
- 3 Literature in Education

Part 2 Exploring Research in Language, Literature and

Education

- 4 Researching Language in Literature
- 5 Readers Reading Literature
- 6 Educational Perspectives

Part 3 Researching Literature in Language Education (LLE)

- 7 Research Methods for LLE
- 8 Carrying Out Your Own Research Project in Literature in Language Education
- 9 Guide to Resources for Research in LLE

本書の特徴は、(1)上の目次からも分かるように、章に掲げられたテーマごとに文学と英語教育に関わる新旧の研究や実践が概観できる点と、(2)その概観を通してHall自身の考えを垣間見ることができる点にある。この2点を踏まえつつ、本書評では章ごとに本書を紹介したい(文献リストである第9章は除く)。なお、本書評の筆者自身が文学を用いた英語教育の実践・研究を行っていることから、Hallによる本書が日本内外の英語教育における文学使用に与える示唆にも適宜言及する。

第1章ではまず、Carter and Nashを引用しながら、文学言語と日常言語の峻別の難しさに触れている。

Features of language use more normally associated with literary

contexts are found in what are conventionally thought of as non-literary contexts. It is for this reason that the term literariness is preferred to any term which suggests an absolute division between literary and non-literary. It is, in our view, more accurate to speak of degrees of literariness in language use. (11; 18)¹

「文学性」(“literariness”)は文学のみならずあらゆる言語使用に備わっているというこの引用中の考えに賛同する時のHallは、文学の内容面よりも言語面(文体)に着目していると考えられる。これに対し、文学を「ディスコース」(“discourse”)として扱うことの重要性を説く研究者・実践者に賛同する時のHallは、文学の内容面により着目していると言えよう。というのも、次の引用にあるように、ディスコースに関わるということは、考えや信念や価値観(つまり、文学に描かれた内容)を問い直しながら、社会で行動することを意味するからである。

A view of language as discourse emphasises that language is a form of social action, that we do things with words (and others do

things to us). ... Engaging with discourses we signal and discover who and what we are in given contexts of communication, ‘making sense’ of ourselves, of others and of our worlds through our communicative resources, formulating or reformulating ideas, beliefs and values and our relations with one another. (41)

このことは新批評の考え方と対照的である。新批評は紙面上の言語のみに関心を払うことで文学を社会的・歴史的な文脈から切り離してしまった(13)。これに対し、文学を「ディスコース」として扱うことは、文学を取り巻くコンテクストである社会に文学を通じ参画することを意味する(40)。以上のように第1章でHallは、「文学性」と「ディスコース」といった概念に依拠しながら、文学を通して日常言語や広範な社会活動の場を意識することの重要性を説いている。この考えを英語教育に当てはめると、日常言語における文学的工夫を言語面から考察したり、文学に描かれた内容を現在の日本というコンテクストにおいて捉えなおしたりすることが考えられる。

第2章では主に、読者反応理論や同理論に基づいた実践が紹介されている。中でもLouise Rosenblattは、「文学教育にもっとも直接的な影響を与えた読者反応論者」(53)として紹介されている。Rosenblattは読み方を“effluent

¹ 本書が直接引用している他文献については、括弧内に本書での掲載頁を示した後、セミコロンの(;)に続いて引用元の文献での掲載頁を示す。

reading”と“aesthetic reading”とに大別した上で、いかなるテキストもこれら二つの読み方ができるとした(54)。“efferent reading”が必要な情報を正確に取り出すことを目的とした読み方であるのに対し、“aesthetic reading”では読者一人ひとりがテキストから何を読み取るかが重要となる。無論，“aesthetic reading”でも、テキストに書かれていることを誤読してはならない。しかし、書かれている内容を「正確に理解」した上で、その内容にどのように反応するかは読者次第なのである。読者反応を重視する“aesthetic reading”において、文学は楽譜の役割を果たすという Rosenblatt の次のたとえを Hall は的確に引用している。

The poem, novel or play ... resembles a musical score in its combination of openness and constraint. (55; 13)

Rosenblatt の“aesthetic reading”は「特別な訓練を必要としない、読者の自然な反応」(55)を前提としているため、「1960～70年代のイギリスやアメリカの[母語]教育実践の拠り所として広く認められることとなった」(54)。一方、日本の英語教育では、“aesthetic reading”が注目されることはなかったと本書評の筆者は認識している。その証左として、英語教科書中に掲載されている文学教材に付された発問は、書かれた内容を正確に読み

取る“efferent reading”に関わるもの(例:「この物語の主人公が幽霊に遭遇したのはいつ、どこですか」)がほとんどである。英語はほとんどの日本人にとっては外国語であり、イギリスやアメリカの母語教育の実践を「直輸入」することには無理があろう。しかし、“aesthetic reading”の考え方を取り入れながら、読者一人ひとりの反応を汲み取るような英語教育の在り方を探る価値は十分にあると考える。文部科学省による『学習指導要領』では、「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能を互いに関連させる(=「統合」させる)ことの重要性に触れられている。文学こそ、「読」んだものに対する自分の反応を「書」き、それに基づいて口頭発表を行い、さらには即興で質疑応答を行うことで「話」したり、「聞」いたりする技能を磨くのいうってつけの素材ではなかろうか。

第3章は、第二言語及び外国語としての英語教育の全体的な流れを踏まえつつ、その中における文学の役割を論じている。1970年代に台頭し始め、現在でも大きな影響力を持つ指導法の Communicative Language Teaching (CLT) は、「現実に近い文脈において、言語の意味に焦点を当てながら、言語を使って活動する中で学ぶ」(116)ことに重きを置く。Hall は、CLT の観点から見た文学の意義を次のようにまとめている。

・文学は、個々の学習者が抱く様々な関心に応えるだけの広範な題材を提

供してくれるため、意味を伴ったタスクや文脈の細かな設定に適している。

- ・日常生活において言語の意味を汲み取る際、「行間を読む」能力は不可欠であるが、文学は同能力を磨くのに適している。
- ・文化の壁を越えて意思疎通を図る必要が現実にあるが、文学は「異文化間コミュニケーション能力」の育成に役立ち得る。(116)

文学と CLT との相性が決して悪いものではないというこのような Hall の主張は正しいと考える。問題は、Hall も指摘するように、これらの主張を裏付ける実践や研究が不足していることにある (112)。英語教育「学」の研究方法には調査研究や事例研究や実証研究等があるが (松浦 59)、様々な研究方法にはほぼ共通しているのは、主張を裏付けるデータの収集とその分析がなされるということである。英語教育学と文学とを結びつけようとする際に肝要なのは、主張や提言のみに終始するのではなく、これまでに蓄積されてきた英語教育「学」の研究方法に則りつつ、データにものを言わせるような研究を行うことであると考え。さらに付け加えるなら、英語教育に文学を持ち込もうとするならば、評価の問題にも取り組む必要がある。文学の場合、読者によって読み取るものが異なるわけであるが、そのような多彩な読みは第二言語教育では評価の対象とはされてこなかった、と Hall も指摘する

(134)。正確な字義理解のみを評価の対象とするのではなく、例えば論理性や説得性なども見取る方法を考案することによって、読者の多彩な読みも評価対象に加えることができるのではなかろうか。

Part 2 を構成する第 4～6 章はそれぞれ、Part 1 の第 1～3 章に対応しているが、Part 1 よりも実証的な研究を紹介している。文学テキストの文学性に関する実証研究を主に紹介している第 4 章から、本書評では 2 点の研究を取り上げたい。1 点目は、Willie van Peer が 1986 年から継続的に行ってきた研究である。同研究では、学習者は重要だと感じた表現に下線を引き、その理由も書くように指示された。結果、重要だと感じた箇所は概して一致しつつも、理由は様々であった (165)。この結果は、前述の読者反応理論における“aesthetic reading”を実証するものとして興味深い。また van Peer の研究は、学習者に下線を引かせた上で、コメントを書かせるという手法そのものが簡単であり、日本の英語学習者を対象としても容易に実践できよう。2 点目は、Henry G. Widdowson らによる文学テキストの簡易版に関する研究である。原文の英語を、より平易なものに書き換えた簡易版は、かえって読み難さを増大させることもあるという Widdowson の次の考察を Hall は引用している。

Modification of lexis and syntax

does not necessarily make a passage simpler to interpret as discourse but may indeed make it more difficult. (174; 183)

現実には、日本の中高英語教科書に掲載されている文学の多くが平易な英語に書き換えられている。また、ペンギンリーダーズ等の簡易版も、主に多読教材として日本でも使用されている。簡易版が流通しているというこのような現実と、Widdowson が指摘する簡易版の読み難さの問題との折り合いをつけるために、例えば簡易版と原文を学習者に比較させてみてはどうだろうか。簡易版の英語を通して、原文の表現への気づきが促されることが期待される。

第5章では、読者に焦点を当てた実証研究が紹介されている。読者の読解を分析する際、その読解過程も重要な研究対象となる。読解過程を明らかにするために、読解中に考えていることを口に出してもらおうという思考発話法 (think aloud method) をデータ収集に用いることがある。しかし、これにはやりにくさや不自然さが伴う。思考発話法よりは、David Hanauer の研究にあるように、読解活動をペアで行う中で読解過程を口に出してもらう方が実践し易いと Hall は指摘している (187)。Hanauer では、英語を外国語として学んでいる大学生 (上級レベル) による詩の読解過程が、英語母語話者のそれとほぼ同じであったことが判明

した (187)。同じ詩を用いて、例えば日本の大学に通う中級レベル英語学習者を対象に同様の調査を行ってみてはどうか。両者 (Hanauer の調査協力者と日本の大学生) の読解過程に違いがあるとすれば、その違いから学習すべき項目が分かってくるかもしれない。読解過程と関連して、Hall が紹介する Douglas Vipond と Russell A. Hunt の “point-driven reading” (読むべきポイントを絞りながら読み進める読解法) も興味深い。Vipond and Hunt の論文 “Point-driven Understanding” は、文学の優れた読者がこの読解法を効果的に用いることを実証的に示した (190)。また Vipond and Hunt による別の論文 “Literary Processing and Response Transactions” では、異なる読解目的を持つ読者は異なる読み方をすることがやはり実証的に示されている (192)。このことを日本の中高英語教育に当てはめてみると、仮に中高生が「文学的な読み」を実践できないのであれば、それは文学の読みの目的が分かっていないからだとも考えられる。日本の中高生は、書かれた内容を正確に読み取ることを絶えず要求されており、そのために正確な読み取りが目的化していると推察される。もちろん正確な読みも重要であるが、文学の場合は、正確な読みに基づいた鑑賞や解釈こそが最終的な目的になるべきであろう。文学を読む目的が学習者に伝わるような工夫を指導や教材に施す必要があると考える。もっとも、鑑賞や解釈

となると、学習者（や指導者）によってはハードルが高いと感じるかもしれない。誰しものが文学を身近に感じることができるようになるためには、文学から受ける情意的な反応も文学の読解目的に含めるべきと考える。例えば、『トム・ソーヤーの冒険』を読んでワクワクした。特に〇〇の場面では、トムの知恵やはじけるようなエネルギーに触れ、胸のすく思いがした。また、“Ah, if he could only die temporarily!”という言い回しは面白いと思った」といったような感想も、この例にあるようにテキストに書かれた内容や表現を根拠にしている限り、情意的に反応するという目的にかなった読みとみなしても良いのではあるまいか。本書第5章は全部で4節から構成されているが、その第4節のタイトルは“Affect in literary reading”であり、Hallも文学読解における情意的反応を重視していることが分かる。もっとも、HallによるGreenからの次の引用にあるように、情意が取り上げられることはあまりなかった。

What is generally overlooked by philosophers, cognitive scientists and even linguists is that language causes feelings, produces emotions and moves people. When we read a work of literature, for example, it is not some mental representation that enables us to feel the way we do, it is the power of words. (196; 66)

そして、この情意軽視の状況は今でもほぼ変わっていないとHallは指摘する(198)。「ことばの力」に心を動かされること自体を読解目的とし、かつ感じたことを根拠とともに表出するような実践や、その効果を検証する研究が望まれる。

第6章では、評価の問題が再び取り上げられている。Hallによると、第二言語教育における文学の使用を評価の観点から扱った研究は驚くほどなされておらず、唯一の研究書はChristopher Brumfitが1991年に編集した*Assessment in Literature Teaching*である(211)。研究が手薄なのは、「教師が自信をもって正誤を判断できるのは、字義理解を測るような問題だけ」だからだとHallは分析する(211)。この現状を打破するためにHallは「文学に関わる評価の発展型」(213)の例を五つ提示している。これらのうち、“the use of journals, reading diaries to record and explore response” (213)という例を参考にすると、文学作品を読ませ、その「あらすじ」や「感想」を書かせるだけでも評価の材料になり得る。あらすじを書くためには「全体」を読まないといけない上に、感想を書くためには自分にとって何らかの働きかけがあった「部分」を少なくとも探す必要がある。この全体と部分の読解ができていのかどうかを教師は評価するわけである。より大胆に、あらすじだけでも良いかもしれない。というのも、Hallからの次の引用にある通り、あらすじも「自分

にとって何らかの働きかけがあった部分」と深く関係しているからである。

Summaries of course always involve interpretation, and these interpretations seem to tell us about the students' own interests and feelings as much as about the plot. (223)

Hallによれば、ディスコース分析等の研究に携わっている Claire Kramsch も、あらすじを通じて「自己のアイデンティティや感情」を見つめ直すといった学習効果に言及している(224)。あらすじなり、感想なりを評価するに際し、それらを『学習指導要領』に則り発表・やり取りに結び付ける等のバリエーションももちろん可能であろう。

第7～9章から成る Part 3 では、主にデータ収集法や研究方法が紹介されている。一般的に研究は、データ収集法の違いによって質的研究と量的研究とに大別されるが、Hallが紹介しているのはもっぱら質的研究の方である。第7章に入る前の Part 3 全体を説明する部分では、「質的研究の典型的なデータ収集法」(235)として、(1) 観察、(2) インタビュー、(3) 文書やアンケートや日誌等、書かれたテキストの分析、(4) ライフヒストリーのような語りへの着目が挙げられている。これら収集法のうち何を選ぶかは研究方法によって変わってくる。例え

ば、第7章に紹介されている研究方法のうち、Martin and Laurieの「調査研究」(“survey research”)では、アンケートやインタビューを通してデータ収集が行われ、フランス語を外国語として学ぶ中級レベルの学部生が、フランス語学習において文学教材をどのように捉えているかが調査された(252-53)。研究方法には他に「実験研究」(“experimental research”)や「事例研究」(“case studies”)や「エスノグラフィー研究」(“ethnographic study”)等がある(240-41)。ここでは、エスノグラフィー研究の例としてHallが挙げているZubairの二つの論文“Women's Critical Literacies”と“Women's Identities”(前者の追跡研究)に触れておく。自身が担当する授業の中でZubairは、英語を外国語として学ぶ18～22歳のパキスタン人学生63名(うち女性は42名)と、チョーサー、シェイクスピア、オースティンの作品を読んだ。Zubairがフェミニスト的観点を与えつつ、作品の批判的読解を促したところ、慣れない読み方に最初は戸惑いを見せた学生たちも、次第に討論に熱を入れ始め、作品の内容を自分たちが抱えている問題に引き付けて考えるようになった。例えば、「オフィーリアは従順な娘だと思いますか」といったZubairからの質問は、自分たちを取り巻く保守的な社会や考え方への抵抗心(“resistance”)を学生たちに生み、自分たちのアイデンティティを問い直すきっかけになった

ようである(264-65)。このエスノグラフィー研究で取られたデータ収集法は、授業内での活動の音声の記録、授業担当者であるZubair自身による観察、授業外に実施されたZubairと学生による一対一でのインデプスインタビュー(“in-depth interview”)等である(264)。なお、インデプスインタビューとは、学習者の体験や考え方を文字通り深く探りながら実施されるインタビューのことである。このようにエスノグラフィー研究では、研究対象者の行動をしっかりと観察したり、話をじっくり聴いたりすることによって、彼/女らの思考やその変容を詳細に記述し、分析することが行われる。前述(第1章を扱った段落)の通り、文学をディスコースとして扱うことの重要性をHallは説いている。文学をディスコースとして扱う中で、文学に書かれた内容が学習者自身の考え方や気持ちにどのような影響を及ぼすのかを探るのに、エスノグラフィー研究は非常に有効な研究方法と言えよう。興味深いのは、エスノグラフィーという研究方法がきっかけとなって、文学をディスコースとして扱う実践が促進される可能性があることである。

第8章では、Hall自身が考えた、文学を用いた英語教育の研究例がProject 1～Project 6として紹介されている。プロジェクトごとに、研究目的、研究課題、予想される結果、データの収集法、分析等、研究の一連の流れが示されており、この流れに沿えば

英語教育学の研究論文が書けるようになっている。例えば“Project 5: Attitudes to Literature”の「研究目的」は、学習者の気持ちが学習効果を左右することを研究の背景として、文学に対する学習者の気持ちを調べることである。同プロジェクトの「研究課題」は「学習者はどのような文学が好きなのか」であり、「分析」に基づいた示唆は「学習者中心のシラバス作成や教材選択が望まれる」(286-87)である。第8章の最後には、最近注目されつつある研究テーマが紹介されており、例えば「文学サークル」や「文学における翻訳の活用」や「文学が読者の情意面に与える影響」等が挙げられている。第7、8章を通じHallは質的研究のみに言及してきた。しかし、文学が対象であっても、量的研究は可能だと考える。例えば、学習者の文学読解に対する情意的反応をめぐって、(1)字義理解を目的とした読解の場合と、(2)字義理解に基づいた解釈を目的とした読解の場合とで比較してみてもどうだろう。ある程度の人数を対象に、「楽しい」と「楽しくない」を両極とする5件法や6件法のアンケートを実施し、仮に学習者が(1)よりも(2)を「楽しい」と回答し、統計的にも有意差が認められれば、解釈は学習者の情意面に好影響を与えるということになる。

以上、Hallの*Literature in Language Education* (2nd ed.)を評してきた。本書評の筆者は約30年前に研究者として

の道を歩み始めた。先行研究という広大な海を目の前にして、どこに向かって泳ぎ始めて良いものやら途方に暮れたのを覚えている。その時、溺れそうになる筆者を救ってくれたのが、Oxford 大学で長く教鞭を取った Terry Eagleton 教授が書いた *Literary Theory: An Introduction* であった。現在筆者の元で研究論文を作成している学生の多くが、文学を用いた英語教育について研究している。その学生たちにとって Hall の本書は、筆者にとっての Eagleton の書のような役割を果たしてくれるのではあるまいか。

*本書評は、科研費助成事業の学術研究助成基金助成金（2018年度基盤研究（C））課題番号18K00374「文学の原作とそのリトールド版との比較に基づいた英語学習法及び教材の開発」（研究代表者：小野 章）の補助を受けて執筆された。

参考文献

- Brumfit, Christopher. ed. *Assessment in Literature Teaching*. London: Macmillan, 1991.
- Carter, Ronald, and Walter Nash. *Seeing through Language: Styles of English Writing*. Oxford: Blackwell, 1990.
- Green, Keith. "The Tip of the Iceberg: Real Texts, Long Texts and Mental Representations." *Contextualized Stylistics*. Ed. Tony Bex, Michael Burke and Peter Stockwell. Amsterdam: Rodopi, 2000. 49-66.
- Hanauer, David. "The Task of Poetry Reading and Second Language Learning." *Applied Linguistics* 22 (3) (2001): 295-323.
- Kramersch, Claire. "Social Discursive Constructions of Self in L2 Learning." *Sociocultural Theory and Second Language Learning*. Ed. James P. Lantolf. Oxford: Oxford University Press, 2000. 133-54.
- Martin, Anne L., and Ian Laurie. "Student Views about the Contribution of Literary and Cultural Content to Language Teaching at the Intermediate Level." *Foreign Language Annals* 26 (2) (1993): 188-207.
- Rosenblatt, Louise. *The Reader, the Text, the Poem: The Transactional Theory of the Literary Work*. Carbondale: Southern Illinois Press, 1978.
- Vipond, Douglas, and Russell A. Hunt. "Point-driven Understanding: Pragmatic and Cognitive Dimensions of Literary Reading." *Poetics* 13 (1984): 261-77.
- . "Literary Processing and Response Transactions: Evidence for the Contribution of Readers, Texts, and Situations."

Comprehension of Literary Discourse: Results and Problems of Interdisciplinary Approaches.
Ed. Dietrich Meutsch, and Reinhold Viehoff. Berlin: de Gruyter, 1989. 155-74.

Widdowson, Henry G. *Explorations in Applied Linguistics*. Oxford: Oxford University Press, 1984.

Zubarir, Shirin. "Women's Critical Literacies in a Pakistani Classroom." *Changing English* 10 (2) (2003): 163-73.

---. "Women's Identities and English in Pakistan." Unpublished manuscript. 2003.

松浦伸和「英語教育学研究の発展と展望—研究の内容と方法—」『教科教育学研究』17(2002)：53-63.

文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編』開隆堂 2019.

広島大学 小野 章